



教職支援センター ニュースレター

巻頭言

【「問い」を問い続けること】

ウィズ・コロナの時代は、まさに予測困難性を象徴するVUCA時代の到来を体現するものである。

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う学校休校の長期化や外出自粛は、子ども・若者の日常生活の送り方、心の保ち方、学びのあり方に大きな影響を与えた。与えられた目的の中で大量の情報を高速処理するAIの存在とともに、これからどのような未来社会を創っていくことができるのか、私たち人間には人生の目的それ自体のあり方が問われているのである。

これまでの学びは、教科書の内容を計画的にこなし、知識をインプットする授業が中心だった。これに対して、今後は、知識の習得・活用を前提としながら、学習者が自ら設定した「問い」に向き合い、思考を深め、思考したことを多様な方法を通じてアウトプットしていくことが重視されている（思考の外化）。そして、ここに多様な評価の観点が入ることで、学習者自身が自分の成長（変容）を認識し、主体的に次のステップを踏み出していく展開が期待されている。

VUCA時代において一番恐れるべきことは、投げかけられている「問い」に向き合うことができず（をせずに）、「思考停止」に陥ることである。何のための、誰のための取り組みか、という教育実践の「哲学」を真摯に問い続けなければ、さらなる混乱が生じるだけでなく、最も支援が必要な子どもたちに「しわ寄せ」が及ぶ可能性があることに、私たちはより自覚的である必要がある。

例えば、「学びを止めるな」のスローガン。このスローガンを前に私たちが問い直さなくてはならないことは、そもそもこれまでの「学び」は妥当だったのかという問いである。私たちは子どもたちに「適切な」学びの機会を十分に保障できていたのだろうか。「止めるな」とされる学びの対象は、「従来」の学び（のスタイル）でいいのだろうか。

さらに、学校再開後に私たちの脳裏をよぎる「とりもどす」という感覚。学校再開後に教育関係者が「とりもどす」べきものは何か。学習の「遅れ」と即断しては、この問いが投げかけるより本質的なものを見失うことになる。学校再開後に何よりも「とりもどす」べきものは、子どもと教員が紡いできた「心理的安全性」(psychological safety)を確保することであつたはずである。そして、これから教育関係者が一丸となって志向すべき方向性は、学びの「進度」だけではなく、学びの「深度」(深まり)ではなからうか。

ところで、コミュニケーションの語源はラテン語の「コムニス」(communis)であるが、その意味するところは、話し手と聞き手の間に感情や情報が共有されることにある。では、休校中に課題や宿題のプリントを渡された子どもたちや保護者は、何を感じたのだろうか。学校や教育委員会は、「紙」や「メール」等を通じて、子どもたちや保護者にいかなるメッセージを伝えようとしたのだろうか。果たして、教育関係者は子どもたちや保護者の不安(生活の不安、心の不安、学びの不安)に寄り添い、安心感を与えることはできていたのだろうか。何を伝えようとし、何が伝わったのか。相手に何かを「伝える」ためには、その方法もさることながら、相手に「伝わる」言葉選びも重要となることは言うまでもない。

学校現場の試行錯誤が「見える化」(可視化)されていないことから、学校不信・教育不信・社会不信が蔓延しつつある。教育行政は挑戦のためにリスクを取ろうと奮闘している学校関係者のモチベーションをどのように維持できるか、条件整備の役割を担うべき教育行政の見識が改めて問われている。

COVID-19は、私たちに何を投げかけているのか。「問い」は尽きることがないが、向き合い続け、問い続けなければならない。それはVUCA時代における教育関係者の社会的使命なのではないかと思う。自戒を込めて。

荒井英治郎(教職支援センター 准教授)



シリーズ 活躍する卒業生

教職支援センターの前身の教職教育部が発足して10年以上が経ち、多くの卒業生が教育現場で活躍しています。毎回テーマを決めて、卒業生の活躍を紹介します。

～ vol.10 理学部編 ～



白馬村立白馬中学校

三村 詩織 先生

大学院総合理工学研究科 平成30年度修了



プリントの「結果」の欄に記入しながら実験動画を見よう

チャレンジQ
導入の動画の、水素と酸素が結びつく化学変化の様子をモデルで表してみよう

※ヒント
原子は化学反応によって消えたり新しくできることはない。
反応前と反応後の原子の数が同じになるように考えてみよう

水素 + 酸素 → 水

結果

- ・砂皿に置いた時のようす
- ・加熱前後の物質の性質のちがいをまとめる。

	A 鉄と硫黄の混合物	B 加熱後の物質
磁石を近づける	磁石にくっつく	あまりくっつかない
見ためや手でさわった感触		黒く変化する
うがい皿酸を加える		

2019年3月に信州大学大学院総合理工学研究科を修了し、白馬中学校に赴任してから1年と3ヶ月が経ちました。楽しいときもあればつらいときもありますが、生徒から「理科の実験が楽しい」「理科が好き」と言ってもらえた時にはこの上ない喜びを感じます。

3月、緊急事態宣言が発令され、全国的に休校の波が広がりました。白馬中では数年前から生徒1人に一台ずつタブレットPCが整備されていたことや地域の協力を得られたことが功を奏し、いち早くオンライン授業を実現することができました。

オンライン授業は、わたしにとって学校の役割とはなんなのかを考える機会になりました。知識の伝達であれば、学校が慌てて用意するよりもクオリティの高いものがインターネット上にあふれかえっているためです。オンライン授業研修では、「双方向性」が大切だということを強くいわれました。白馬中ではチャットでの生徒教師間・生徒間のやりとりや、参加者を少人数グループに分配する機能を利用して通常授業の話し合い活動をできるだけ再現することに力をいれていましたが、このような取り組みを続けているうち、わたしには学校でしかできない学習とは、ほかの子と協力してものを考えたり、意見をまとめたりするような学習や自宅ではできない体験活動ではないかと思えてきました。

思えば、通常授業をやっているときも、テスト前に「youtubeの動画をみて勉強した」と言っている子はちょくちょく見ます。わ

かりやすい教材や解説がインターネットで検索すればすぐ出てくる時代、学校にしかできないことをやっていかなければいけないんだということを強く感じました。

自分自身、科学が好きで教員になったので、自分としては、できるだけ自然法則を自分で体験して「なるほど!」と思う体験を積んでほしいという願いをもって日々の授業づくりに取り組んでいます。知識を教え込むだけの授業ではなく、実験をたくさんやって、なぜそうなるのかをたくさん話し合っ、自分も生徒も楽しく学べるような授業を目指していきたいなあと考えています。

長野県松川高等学校

佐々木 碧 先生

理学部 数理・自然情報科学科 平成26年度卒業



大学を卒業して早6年。現在私は、長野県松川高等学校で1年生の担任をしています。大学卒業後は地元に戻り、小中一貫校にて2年間お世話になりました。そこで「やはり高校で働きたい」と思い講師登録をしたところ、岡谷工業高等学校にて2年間経験を積ませていただきました。通算4年間の講師経験を経ての採用でしたし、普通科の高校は初めてということで、元々の自分の夢実現という点においては少々遠回りをしてきたようにも思います。しかし、それぞれの場所での経験が活きていると感じることもあり、仕事をする上で無駄な経験などないのだとも思います。

松川高等学校での1年目は、ただひたすらに慌ただしく過ぎ去っていきました。日々の授業の研究や準備はもちろん、校内外での初任者研修、生徒会や二つの部活動を始めとする分掌業務など、これまでの4年間では経験してこなかったものも多くありました。しかし同期や職場の方々、生徒たちに恵まれ、なんとか乗り切ることができました。

この5年間の経験から、学校で働いていく上で「生徒ときちんと向き合い認めること」「教員間の連携」が大切だと今は思っています。まず前者についてですが、地域校と呼ばれる本校には、義務教育の段階で活躍した経験が少なく自己有用感や自己肯定感の低い生徒や、今まで私が関わったことのないような背景を持つ生徒が多くいます。また、就職する生徒も多く、進学する生徒も基本的に推薦で受験します。この状況下で生徒たちが自分自身を見つめ進路を決めていくためには、私たち教員が生徒一人一人と向き合うことが必要だと感じました。それぞれがどのような個性を持ち、どの程度諸活動に取り組むことができるのか見極め、小さなことでも認め関わっていくことで、自分と本当の意味で向き合う生徒が増えていけばと思っています。後者に関しては、大なり小なり人間関係や学習等で悩みを抱える生徒が多い学校現場においては、教員がチームとなり対応する必要性を感じるからです。何人かが話を聞き、それらを共有することで、該当生徒にとってよりよい支援を考え支援することができるのだとこの1年過ごしてきて実感を持って理解することができました。幸い、本校は国語数学英語の研究室が揃っており、情報のやり取りを行いやすい環境にあります。今後も困ったことや悩みはすぐ相談して、素早い対応ができるよう意識していきたいです。

今年度はついに初担任ということで、大きな不安を抱えながらも新入生を迎えました。学年の担任、副担任の方々が常に気にしてくださり、また生徒たちも心優しい子たちばかりで比較的安定して過ごせています。コロナウイルスや大雨により休校が多く、生徒と会えない悲しさや進まぬ授業への焦りが多々ありますが、学校に関わるすべての方たちと協力し合って乗り越えていきたいと思っています。



教職支援センター5～7月の動き



- CST養成プログラム実施委員会(6/8-12【メール審議】)
- 教職支援センター運営委員会(6/22-26【メール審議】)
- 教員免許更新支援センター会議(6/30【オンライン開催】、7/20-27【メール審議】)
- 教員免許更新支援センター運営委員会(7/28-30【メール審議】)

教育実習を終えて

教育実習を無事に終えた

4年生からの報告です！



時間に追われながらも密度の濃い2週間を過ごし、授業だけでなく部活動指導、休み時間での生徒たちとの関わりなどから多くの学びを得た実習だった。この実習で感じたことの中で特に印象に残っていることが3つある。

1つ目は授業の難しさだ。初日から多くの先生の授業を参観させていただき、適切な発問の仕方、ICTの効果的な活用などに感服の連続であった。自身が授業をするときに、「クラスの雰囲気にあった授業」というものが言葉では簡単そうだが実際は非常に悩んだことだった。また、教材研究や実験準備に時間をかければかけるほど、自身が感じる理科の面白さの再確認と、授業中の生徒からの発言や疑問からの学びが多くあった。

2つ目は生徒の力だ。これまでずっと教わる立場でいた私にとって、教えるという立場だからこそ初めて感じた力だった。生徒の興味、考え、発言の交流があってこそこの学びだということを強く実感した。

3つ目は中学校教諭の仕事のやりがいである。多岐にわたる業務で大変なこともある一方、実習校の先生方の職員室での様子や生徒との関わり方を見て、また、自身の充実感とやり終えた達成感から、先生という仕事の魅力を感じた。

本実習は、コロナの影響で学校の臨時休業も余儀なくされる前例のない事態のなかでの非常に貴重な体験であった。実習にあたり、丁寧なご指導と手厚いサポートをしていただいた信州大学教職支援センターの先生方、温かく受け入れてくださった母校の先生方と元気で礼儀正しい生徒たち、家族や友人、その他私の実習に携わっていただいたすべての方に感謝の気持ちでいっぱいだ。この実習で得たこと、ご指導いただいたことを思い起こし、今後に生かしていきたいと思う。

1年生の植物の単元で授業を行いました。自然が豊かな地域であることの特権として、あらゆる植物の実物を見せることに拘っていたため、出勤前の早朝や休日も教材となる植物探しに力を入れていました。↓



←最後の研究授業ではシダ植物の胞子のうが飛び出すところを双眼実態顕微鏡で観察しました。ちょうど良い熟し具合の胞子を集めることは非常に大変でしたが、授業では生徒から驚きや感動の声を多く聞くことができ、先生方からも多くご好評をいただきました。



最終日の帰りの会でとっていただいた写真は、コロナ対策で全員常時マスク着用だったため、唯一みんなの顔をみることができる貴重な1枚となりました。↓



(繊維学部先進繊維・感性工学科 4年 高津果琳
実習期間 6/15～6/26 実習校 福井県大野市開成中学校)

編集後記

教職関係の授業では、一部の実験系の科目を除き、ほぼオンライン授業のまま前期が終了しました。慣れない形式に、学生も教員も疲れややりにくさはありませんでしたが、そのようななかでも皆さん、着実に学びを深めてくれています。今号の巻頭言や卒業生、学生の声にもコロナ禍の教育へのヒントがたくさんあるように思います。ぜひ、ご一読ください。(広報担当 河野桃子)

